

平成二十七年十二月十日発行  
皇學館論叢第四十八卷第六号  
抜刷

「空海卒伝」と『贈大僧正空海和上傳記』

多  
田  
圭  
介

皇學館論叢 第四十八卷第六号  
平成二十七年十二月十日

# 「空海卒伝」と『贈大僧正空海和上伝記』

多田圭介

## □ 要 旨

初期の空海の伝記史料として、貞観十一年（八六九）成立の『続日本後紀』に掲載されている「空海卒伝」と寛平七年（八九五）成立の『贈大僧正空海和上伝記』がある。従来の研究では、この二伝の関係を直接の「継承関係」としてきた。そこで本稿では、改めてこの二伝を比較検討した。その結果、『贈大僧正空海和上伝記』の作者は「空海卒伝」を直接参照していない可能性が高いことを指摘した。そのうえで、この二伝をつなぐ「原空海伝」の存在を想定した。

## □ キーワード

『続日本後紀』

『贈大僧正空海和上伝記』

『三教指帰』

空海

## はじめに

平成二十七年は、空海が高野山を開創して二二〇〇年となる節目の年である。そんな空海は、「日本の歴史上、その右に出るものはいない、といわれるほど」<sup>①</sup>豊富な伝記史料を有している。その数ある空海の伝記史料の中で、成立年代が明確であり且つ最も古いものが『続日本後紀』承和二年（八三五）三月丙寅（二十五日）条に記載される所謂「空海卒伝」である。<sup>②</sup>この伝記は、『続日本後紀』が編纂された斉衡二年（八五五）から貞観十一年（八六九）までの間に成立したものである。正史に記載されているため、客観的に記されているという性格を持つ。そのため、従来空海の伝記研究の根本史料の一つとして重宝されてきた。

「空海卒伝」に次いで古い成立とされるのが寛平七年（八九五）三月十日の奥書を持つ『贈大僧正空海和上伝記』（以下『寛平御伝』と略称）である。空海没後六十年を記念して編纂されたものと考えられ、<sup>③</sup>撰者は「貞観寺座主」である。この撰者については、真雅、聖宝、恵宿が推定されているが、有力なのは長谷宝秀氏が推定されている聖宝であろう。<sup>④</sup>「空海卒伝」と同じく根本史料の一つであるといえる。

さて、成立年の近いこの二伝であるが、後述する通り極めて似通った内容となっている。そのため、この二伝の関係を指摘した多くの先行研究が、「継承関係」としている。改めて簡単に確認しておこう。

空海の伝記史料を初めて体系的に整理されたのが上山春平氏である。<sup>⑤</sup>上山氏は、両伝を「崩伝系統」に分類し「継承関係」と位置づけられた。その後、武内孝善氏が「『寛平御伝』は先行の伝記―それはあるいは『続日本後紀』であつたかも知れない―の影響を受けたものであろうか」と指摘され、<sup>⑥</sup>真保龍敏氏は「空海卒伝」は「後に『贈大僧

正空海和上伝記』（貞観寺座主撰）や、『請賜諡号表一首』（寛平法皇撰）、『弘法大師略伝』（濟暹撰）等に少なからぬ影響を及ぼしていることが認められる<sup>⑦</sup>。そのためか、『平安時代史事典』には、『寛平御伝』は『続後紀』承和二年（八三五）三月二十五日条の入滅記事に基づき、若干の伝説を加えたもの<sup>⑧</sup>と記述され、辻本弘氏は『贈大僧正空海和上伝記』は当時あつた空海の諸説話をまとめようとした文献と考えられ、『空海僧都伝』と『続日本後紀』を参照したものと推測される<sup>⑨</sup>と述べておられる。つまり、『貞観寺座主』は『空海卒伝』を直接参照しながら、『寛平御伝』を編纂したとされているのである。

しかし、改めて筆者が両伝を検討した結果、先行研究の指摘とは異なる結論を持つに至った。本稿では、まずそこを明らかにしていきたい。その上で、両伝の関係・位置付けを再検討することにし、筆者が想定している「原空海伝」の存在にまで言及したいと思う。

## 一、両伝の比較検討

具体的な検討に入る前に、煩を厭わず両伝を掲載しよう。なお、○内の番号は上山氏が検討された際の項目分けの基準を参考にして付したものである。また、両伝で共通する番号は、内容も共通する。太字ゴシック体に関しては、両伝で字句が一致している箇所を示している。

【空海卒伝】<sup>⑩</sup>

①法師者。讃岐国多度郡人。俗姓佐伯直。

②年十五就舅從五位下阿刀宿祢大足。讀<sub>二</sub>習文書<sub>一</sub>。十八遊<sub>二</sub>学槐市<sub>一</sub>。

③時有<sub>二</sub>沙門<sub>一</sub>。呈<sub>二</sub>示虚空藏聞持法<sub>一</sub>。其經說。若人依<sub>レ</sub>法。讀<sub>二</sub>此真言一百萬遍<sub>一</sub>。乃得<sub>二</sub>一切教法文義諸記<sub>一</sub>。於是信<sub>二</sub>大聖之誠言<sub>一</sub>。望<sub>二</sub>飛焰於鑽燧<sub>一</sub>。攀<sub>二</sub>躋阿波国大瀧之嶽<sub>一</sub>。觀<sub>二</sub>念土佐国室戸之崎<sub>一</sub>。幽谷応<sub>レ</sub>声。明星来<sub>レ</sub>影。

④自<sub>レ</sub>此慧解日新。下<sub>レ</sub>筆成<sub>レ</sub>文。世伝。三教論。是信宿問所<sub>レ</sub>撰也。

⑤在<sub>二</sub>於書法<sub>一</sub>。最得<sub>二</sub>其妙<sub>一</sub>。与<sub>二</sub>張芝<sub>一</sub>齊<sub>レ</sub>名。見<sub>レ</sub>称<sub>二</sub>草聖<sub>一</sub>。

⑥年卅一得度。

⑦延暦廿三年入唐留學。遇<sub>二</sub>青龍寺惠果和尚<sub>一</sub>。稟<sub>二</sub>学真言<sub>一</sub>。其宗旨義味莫<sub>レ</sub>不<sub>二</sub>該通<sub>一</sub>。

⑧遂懷<sub>二</sub>法宝<sub>一</sub>。帰<sub>二</sub>来本朝<sub>一</sub>。啓<sub>二</sub>秘密之門<sub>一</sub>。弘<sub>二</sub>大日之化<sub>一</sub>。天長元年任<sub>二</sub>少僧都<sub>一</sub>。七年転<sub>二</sub>大僧都<sub>一</sub>。

⑨自有<sub>二</sub>終焉之志<sub>一</sub>。隱<sub>二</sub>居紀伊国金剛峰寺<sub>一</sub>。

⑩化去之時年六十三。

【寛平御伝】<sup>⑪</sup>（一）の文字は本文では分註である。）

①初讃岐国多度郡人。姓佐伯氏。後移貫京地之俗。宝龜五年甲寅誕生。殊有異相。

②延暦七戊辰。就<sub>二</sub>外舅伊与親王文学<sub>一</sub>（其名未詳）。俗学問焉。（時年十五）。十年幸遊<sub>二</sub>聴槐市<sub>一</sub>。歷<sub>二</sub>学経籍<sub>一</sub>（時年十八）。

③厥後心中漸有<sub>二</sub>避世之志<sub>一</sub>。就<sub>二</sub>於沙門<sub>一</sub>学<sub>二</sub>虚空藏聞持法<sub>一</sub>。遂出<sub>二</sub>学門<sub>一</sub>經<sub>二</sub>行山林<sub>一</sub>。或躋<sub>二</sub>阿波大瀧岳<sub>一</sub>。或勤<sub>二</sub>土左室

戸崎<sup>一</sup>。谷不<sup>レ</sup>惜<sup>レ</sup>響明星来影。既蒙法驗始獲成就。

④先是於播磨国。旅中寄宿路辺隘廬。老嫗出来。盛飯鉄鉢供養和上。語云。妾元行基菩薩弟子僧未出家時之妻也。彼僧存曰以此鉄鉢授妾曰。後代有聖来宿汝宅。須捧此鉢陳汝芳志。今謁来客殊有所感。是以供養。仍感其語。

⑤住伊豆国桂谷山寺。書写大般若經魔事品於虛空中。六書八体文字点画。始揮筆憶樣咸懸驗監視。奇異之事不可勝述奥。

⑥其明年。剃髮出家為沙弥形。(時年二十五)

⑦延曆二十三年四月九日。東大寺戒壇院受具足戒。(時年三十一)

⑧同年六月。銜<sup>二</sup>命留學<sup>一</sup>。随<sup>二</sup>大使藤原葛野麿<sup>一</sup>。同上<sup>二</sup>第一船<sup>一</sup>發<sup>二</sup>赴咸陽<sup>一</sup>。八月到<sup>二</sup>福州<sup>一</sup>着岸。十月十三日与<sup>二</sup>書福州觀察使<sup>一</sup>。十二月下旬。到<sup>二</sup>長安城宣陽坊<sup>一</sup>。管宅安置。二十四年二月十一日。大使等施<sup>二</sup>軸本朝<sup>一</sup>。唯空海。准<sup>レ</sup>勅配<sup>二</sup>住西明寺永忠僧都故院<sup>一</sup>於<sup>レ</sup>是。歷<sup>二</sup>城中<sup>一</sup>訪<sup>二</sup>名德<sup>一</sup>偶然奉<sup>レ</sup>遇<sup>二</sup>青龍寺東塔院和上<sup>一</sup>。法諱惠果阿闍梨。空海与西明寺志明談勝法師等五六人。同往見和上。六月上旬。入学法阿闍梨位之灌頂。兼請<sup>二</sup>真言教文<sup>一</sup>。兩部曼荼羅道具種種法物等。其年十二月十五日。惠果和上入滅。

⑨大同元年十月二十二日。請来法文之狀。附判官正六位上行太宰大監高階真人遠成。和上十一月二十日上表。皇帝御書授大法師位(時年三十七。薦二十七)。天長年中有<sup>二</sup>旱災<sup>一</sup>。皇帝勅<sup>二</sup>和上<sup>一</sup>。於<sup>二</sup>神泉苑<sup>一</sup>令<sup>レ</sup>祈<sup>二</sup>膏雨<sup>一</sup>。自然滂蛇。仍賀<sup>二</sup>其功<sup>一</sup>任<sup>二</sup>少僧都<sup>一</sup>。未<sup>レ</sup>幾之際轉任<sup>二</sup>大僧都<sup>一</sup>。爰和上奏聞。於東寺建真言宗興秘密藏。

⑩承和二年嬰<sup>レ</sup>病隱<sup>二</sup>居金剛峯寺<sup>一</sup>。

⑪三年三月二十一日卒去(時年六十三。薦四十三) 仁寿年中僧正真濟。上奏贈大僧正云畢。和上智行遊出。屢有異標。後葉末資不能委聞。仍錄一端謹以上聞。謹言。

「空海卒伝」と『贈大僧正空海和上伝記』(多田)

まずは、先行研究の指摘の根拠ともなった両伝の間で共通する部分を確認していこう。ここでは敢えて内容に深入りせず、共通点を指摘するにとどめることにする。

①は、出自を述べた部分である。両伝とも「出身地↓俗姓」の順で記されている。しかし、『続日本後紀』の僧侶の卒去記事を見てみると、<sup>(12)</sup>

是日。僧正伝灯大法師位護命卒。法師俗姓秦氏。美濃国各務郡人。

と「俗姓↓出身地」の順で記されている場合が多い。実際、『続日本後紀』掲載の八つの僧侶の卒去記事のうち五つがこの順番となっている。

②と③は、修学・求聞持法・苦修勤念・明星来影の順で構成される。真保龍敵氏が指摘される通り、<sup>(13)</sup>「三教指帰」が序に基づき記されている。参考までに『三教指帰』序の該当部を掲げよう。なお、太字ゴシック体は『三教指帰』が「空海卒伝」・「寛平御伝」の両伝と一致している字句、○が「空海卒伝」のみと一致している字句、△が「寛平御伝」のみと一致している字句である。

### 【三教指帰】<sup>(14)</sup>

②余年志学就<sup>△</sup>外氏阿二千石文学舅<sup>△</sup>二伏膺鑽仰。二九遊<sup>△</sup>二聽槐市<sup>△</sup>。一拉<sup>△</sup>三雪螢於猶志学怠。怒<sup>△</sup>三繩錐之不<sup>△</sup>勤。  
③爰有<sup>△</sup>二沙門<sup>△</sup>。一呈<sup>△</sup>三余虛空藏聞持法<sup>△</sup>。其經說。若人依<sup>△</sup>レ法誦<sup>△</sup>三此真言<sup>△</sup>。一百万遍<sup>△</sup>。即得<sup>△</sup>二一切教法文義暗記<sup>△</sup>。於焉信<sup>△</sup>二大聖之誠言<sup>△</sup>。一望<sup>△</sup>三飛焰於鑽燧<sup>△</sup>。一躋<sup>△</sup>三攀阿国大瀧獄<sup>△</sup>。勤<sup>△</sup>二念土州室戸崎<sup>△</sup>。一谷不<sup>△</sup>レ惜<sup>△</sup>三響明星来影<sup>△</sup>。

こうして見てみると、両伝とも『三教指帰』と記述内容が酷似していることが一目瞭然である。直接か間接かはここでは問わないが、この部分では『三教指帰』が両伝の基礎史料となつてゐることがわかる。

④と⑤、a～cに関しては、それぞれの伝記に独自の文章である。「空海卒伝」の④では『三教指帰』撰述を、⑤では書法に優れていたことが記されている。一方で『寛平御伝』a～cでは靈験筆・出家と構成されている。

⑥については、「空海卒伝」では「得度」、『寛平御伝』では「受戒」と内容に相違はあるものの、同じ「三十一歳」での出来事を記している。なお、『寛平御伝』ではcにて、得度は二十五歳のことと記している。この得度と受戒を巡つては、それだけで専論があり、「空海卒伝」の空海三十一歳得度説は否定されてゐる。<sup>(15)</sup>

⑦は留学の様子、⑧は帰国後の略歴、⑨は金剛峯寺への隠居、がそれぞれ記されている。

⑩では卒去の年齢が記されており、両伝共に「六十三」歳である。卒去年齢を明確に「六十三」歳としているものは、数ある空海の伝記史料の中でもこの二伝だけである。その他多くは「六十二」歳である。

これらの共通点を見れば、確かに先行研究が指摘する通り、『寛平御伝』は「空海卒伝」を基にして撰述されたように考えられる。しかし、冒頭でも述べた通り、『寛平御伝』撰者は、直接は「空海卒伝」を参照していないと考えている。次に、その論拠を述べていこう。

一点目は、『寛平御伝』②に見える「其名未詳」の記述である。この部分は、空海が舅について勉学を学んだことを記している。「空海卒伝」は明確に「舅従五位下阿刀宿祢大足」と記しているが、『寛平御伝』は「外舅伊与親王文学」としか記していない。つまり、「其名未詳」の記述は『寛平御伝』撰者が「空海卒伝」を直接参照していたならば有り得ない記述なのである。

二点目は、年月日を明示して出来事を述べる傾向にある『寛平御伝』の中で、⑧の少僧都任官と大僧都転任の箇所

「空海卒伝」と『贈大僧正空海和上伝記』（多田）



だけ「天長年中」・「未<sup>レ</sup>幾之際」と曖昧に記述されていることである。これも、「空海卒伝」を参照すれば、それぞれ天長元年と同七年の出来事と分かったはずである。

三点目は、卒去の年である。「空海卒伝」と『寛平御伝』では一年のズレがある。これについて武内氏は、『寛平御伝』は「去宝龜五年甲寅誕生」と宝龜五年誕生説に立脚しているので、三年三月二十一日卒去時年六十三。藏四十三。と入定の年次を一年遅らせることによって、その矛盾の解決をはかっていると思われる<sup>16</sup>と指摘されている。それはそうなのだが、そもそも『寛平御伝』は空海卒去六十年を記念して編纂されたはずである。それが正しいのであれば、「承和二年」という年は動かさねいはずである。「空海卒伝」を直接参照していたならばなおさらであろう。つまり、『寛平御伝』撰者は、空海の誕生は「宝龜五年（七七四）」且つ卒去年齢が「六十三」という原史料を基に撰述したのではなかろうか。

主に筆者が論拠としたいのは以上の三点であるが、細かい点を言えば他にもまだある。例えば、『寛平御伝』では『三教指帰』撰述に触れられていなかったり、『寛平御伝』撰述の数年後に『請賜諡号表』が作成されていたりすることである。『請賜諡号表』は空海が「弘法大師」号を賜った延喜十八年（九一八）に寛平法皇（宇多天皇）によって撰せられたものであるが、一点目の問題などは、

生年志学。就<sup>二</sup>外舅伊与親王文学阿刀大足<sup>一</sup>。伏膺鑽仰<sup>17</sup>。

と、解決が図られている。本来『寛平御伝』が「空海卒伝」を参照して撰述されていたならば、『寛平御伝』をそのまま用いればよいのであり、『請賜諡号表』の撰述は不要である。ましてや『寛平御伝』は宇多天皇に上表されたものであり、<sup>18</sup>『請賜諡号表』は宇多天皇が撰述したのである。『寛平御伝』と「空海卒伝」との間に記述の違いがあるからこそ、『請賜諡号表』が撰述されたと考えられよう。

以上の通り、確かに「空海卒伝」と『寛平御伝』との間には共通点が多く見られ、継承関係にあるように思われる。しかし、継承関係にあつては有り得ない記述があることから、筆者は『寛平御伝』撰者は「空海卒伝」を直接参照していなかったと考える。そこで問題となってくるのが、筆者の想定が正しいならば、両伝の記述は類似しすぎているのではないか、ということである。この問題を一体どのように解決すべきか。そこで筆者は「原空海伝」の存在を想定している。それについて、節を改めて述べることにしよう。

## 二、「原空海伝」をめぐる

『寛平御伝』撰者が「空海卒伝」を直接参照していないと考えるならば、どのように編纂が行われたかが問題となる。そこでまず考えられるのが、両伝の撰者が同じ原史料を用いて撰述を行った、ということである。ただ、それにしても一致する点が多すぎるように感じる。特に話の構成まで同じとなつてくると、数々の原史料を参考にしたというよりは、土台となる「原空海伝」なるものが存在したとみるのが妥当ではなからうか。

そこで参考となるのが、「養老職員令」式部省条に規定される「功臣家伝」である。

卿一人。掌。内外文官名帳。考課。選叙。礼儀。版位。位記。校<sub>レ</sub>定勲績<sub>一</sub>。論<sub>レ</sub>功封賞。朝集。学校。策<sub>二</sub>試貢人<sub>一</sub>。禄賜。仮使。補<sub>二</sub>任家令<sub>一</sub>。功臣家伝田事。

その「功臣家伝」とは、『令義解』によれば、

謂。有功之家。進<sub>二</sub>其家伝<sub>一</sub>。省更撰修。釈云。家伝書名也。仮如。三史列伝之類。跡云。家伝。謂功臣之子孫嫡々相継狀況也。（後略）

「空海卒伝」と『贈大僧正空海和上伝記』（多田）

と、五位以上の官人の家にてその子孫が記し、それを式部省に進めて、省がさらに撰修したものと定められている。この「功臣家伝」が薨卒伝作成の際の主要材料であったことは既に指摘されている通りである。<sup>(19)</sup>

これと同じように、僧侶の伝記についても、没後に寺家で作成されたものが基となり、正史に掲載されたことが指摘されてきている。例えば坂本太郎氏は光定・円仁・真済を例にあげ、それぞれの伝記と卒伝を比較して実証されており、近年では佐藤健太郎氏が「寺家で作成された伝記」の存在を指摘しておられる。<sup>(20)</sup>その根拠となるのが『智証大師伝』跋文である。

件家伝記録濫觴者。延喜二年秋。從<sup>ニ</sup>綱所<sup>一</sup>。可<sup>レ</sup>進<sup>ニ</sup>和尚家伝<sup>一</sup>之牒。到<sup>ニ</sup>来寺家<sup>一</sup>。寺家記録。可<sup>レ</sup>進<sup>ニ</sup>国史所<sup>一</sup>之由。牒<sup>ニ</sup>山王院<sup>一</sup>。爰和尚入室良勇十禪師。委<sup>レ</sup>憶<sup>ニ</sup>和尚平生始終之事<sup>一</sup>。同入室鴟与大法師引<sup>ニ</sup>勘和尚手中遺文<sup>一</sup>。兼復同入室大法師。衆口討論。乃令<sup>ニ</sup>最後入室台然筆授略記<sup>一</sup>。其後付<sup>ニ</sup>善学士<sup>一</sup>。令<sup>ニ</sup>撰定<sup>一</sup>之。学士<sup>ニ</sup>以憶<sup>レ</sup>在<sup>ニ</sup>和尚之微旨<sup>一</sup>。一以叶<sup>ニ</sup>於門人之中誠<sup>一</sup>。奉<sup>レ</sup>公之陳。撰述已畢。

これによれば、僧綱から寺家に伝記の作成命令が下り、遺弟が集まって円珍の日々の記録等を基に編纂が行われ、最終的には三善清行が撰定し、国史所へ提出されたという一連の作成過程が明らかである。<sup>(22)</sup>

同じように、空海の伝記に関しても、空海の没後に寺家による作成が行われたものと推測される。この寺家で作成された空海の伝記こそ、筆者が想定する「原空海伝」である。「原空海伝」の一部は撰国史所へ、一部は寺家に伝えられていった。『寛平御伝』撰者は、寺家に伝えられた「原空海伝」を基に撰述を行ったのであろう。つまり、「空海卒伝」と『寛平御伝』の間には直接の継承関係はないのである。前節で見た両伝における共通点は、両伝の撰者がそれぞれ同じ「原空海伝」を参照したことに起因するものと考えられる。<sup>(23)</sup>その点を踏まえて、前節の共通点を簡単に検討してみよう。

①に関しては、「原空海伝」の記述が「出身地↓俗姓」となっていたものと思われる。「空海卒伝」も『寛平御伝』も「原空海伝」の記述をそのまま用いたであろう。

②と③に関しては、「原空海伝」が『三教指帰』を基にした記述となっていたものと推測される。それでも両伝で字句に異同が見られるのは、「空海卒伝」がより『三教指帰』と一致することから考えると、『続日本後紀』編纂方針に起因すると思われる。つまり、『続日本後紀』はなるべく原典にあたって編纂した様子が見られるため、<sup>(24)</sup>「原空海伝」を土台にしながらも、『三教指帰』も参照していたのではなからうか。

⑥については、「原空海伝」に「三十一歳」での何らかの出来事が記されていたものと思われる。その上で、『続日本後紀』撰者は先学の指摘通り「延暦二十四年九月十一日太政官符」<sup>(25)</sup>の記載を基に成文したのである。<sup>(26)</sup>

⑦以降に関しては、『寛平御伝』撰者が「原空海伝」を土台にしながらも、種々の史料を交えてより詳細に撰述したのである。⑩に関しては前述の通りである。

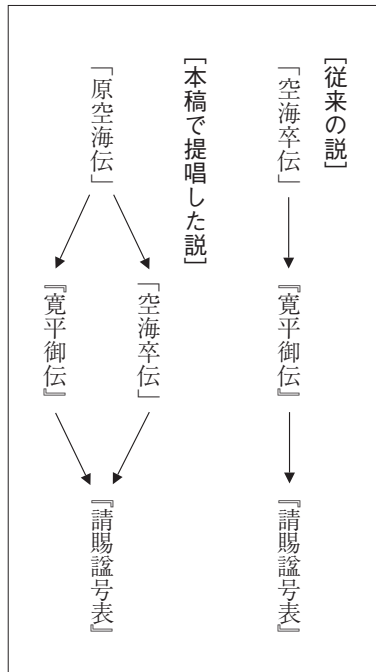
## おわりに

以上、本稿では「空海卒伝」と『寛平御伝』の本文検討を通して、『寛平御伝』撰者が「空海卒伝」を直接参照しているとは有り得ない記述が存することから、従来指摘されてきた両伝間の直接の継承関係は左図の通り見直されるべきであることを指摘した。

また、両伝における類似点の原因に迫り、「原空海伝」の存在を想定した。「原空海伝」とは、空海没後に寺家で作成された伝記のことであり、「空海卒伝」編纂の際にも『寛平御伝』撰述の際にも原史料となった。両伝は、この「原

「空海卒伝」と『贈大僧正空海和上伝記』（多田）

空海伝」を基盤に種々の史料を付け加え撰述していったと考えられる。また、後に「寛平法皇」によって編纂された『請賜諡号表』は『寛平御伝』を中心に、「空海卒伝」も参照して編纂されたものと思われることも併せて指摘しておく。多くの推測を重ねてしまったが、本稿が空海の伝記研究だけでなく、正史編纂研究の一助となれば幸いである。



# 注

- (1) 武内孝善「序論―空海伝研究の現状と課題―」『弘法大師空海の研究』吉川弘文館、二〇〇六年。
- (2) 「空海卒伝」より時代が遡るものとしては、「承和二年十月二日」の奥書を持つ『空海僧都伝』がある。しかし、この成立年は疑問視されている（武内孝善「空海の誕生年次」『弘法大師空海の研究』吉川弘文館、二〇〇六年（初出は一九八二年）等）。
- (3) 『弘法大師空海全集 第八卷』吉川弘文館、一九八五年。

(4) 長谷宝秀編『弘法大師伝全集第一巻』ピタカ、一九七七年。なお、聖宝については、佐伯有清『聖宝』（吉川弘文館、一九九一年）参照。

(5) 上山春平『空海』朝日新聞社、一九八一年。

(6) 武内氏前掲註(2)。

(7) 真保龍敏「大僧都空海伝」解説『弘法大師空海全集 第八巻』吉川弘文館、一九八五年。

(8) 『平安時代史事典』（角川書店、一九九四年）「贈大僧正空海和上伝記」項（執筆は松永有慶氏）。

(9) 辻本弘「空海入定留身説話の形成に関する一考察」『日本語と日本文学』四六、二〇〇八年。

(10) 本文は「新訂増補国史大系」に拠る。

(11) 本文は長谷氏前掲註(4)に拠る。

(12) 『続日本後紀』承和元年（八三四）九月戊午（十一日）条。

(13) 真保氏前掲註(7)。

(14) 本文は『弘法大師全集第三輯』（密教文化研究所、一九六五年）に拠る。

(15) 武内氏前掲註(2)。櫻木潤「空海の得度・受戒年次をめぐって」『続日本紀研究』三六七、二〇〇七年、西本昌弘「国史所載伝記の「嘘」」（『日本歴史』八〇〇、二〇一五年）。

(16) 武内氏前掲註(2)。

(17) 長谷氏前掲註(4)。

(18) 和多昭夫氏は、『寛平御伝』の編纂理由に関して、『寛平御伝』に「謹以上聞」とあるのは恐らく朝廷、すなわち宇多天皇（在位八八七―八九七）に上表した事を意味しているものと思われ、これが本伝作成の主要動機であつたと考えられる」と述べて

「空海卒伝」と『贈大僧正空海和上伝記』（多田）

おられる。(贈大僧正空海和上傳記)『群書解題 第四卷上』続群書類従完成会、一九六一年。

(19) 坂本太郎「六国史と伝記」『六国史』吉川弘文館、一九八九年(初出は一九六四年)。

(20) 坂本太郎前掲註(19)。

(21) 佐藤健太郎「『続日本後紀』掲載の僧侶の伝記について」『日本古代中世の仏教と東アジア』関西大学出版部、二〇一四年。

(22) 『続日本後紀』編纂期の撰国史所に関しては、拙稿「『続日本後紀』の編纂―その原史料を中心に―」『日本歴史』八一〇、二〇一五年。

(23) なお、『寛平御伝』撰者と考えられている聖宝は真雅の弟子である。その真雅は、空海の実の弟である。聖宝は「原空海伝」を入手し易い環境にあったと考えられる。

(24) 拙稿前掲註(22)

(25) 東野治之「大和文華所蔵の延暦二十四年太政官符」『日本古代史料学』岩波書店、二〇〇五年(初出は二〇〇〇年)

(26) 櫻木氏前掲註(15)、西本氏前掲註(15)。

(ただ けいすけ・学法律田学園高等学校教諭)